



フランスの環境保護主義者から見た 原子力エネルギー

エコロジスト Bruno Comby (ブルーノ・コンビ) 氏

本稿は、平成17年11月1日に開催した原子力講演会において、
ブルーノ・コンビ氏が講演された内容をもとに採録・編集したものです。

皆様、こんにちは。きょうは「原子力エネルギーと環境」について、私なりの考えをお話しさせていただきたいと思います。

まず最初に、エネルギー、それから地球という惑星について幾つかお話をさせていただき、その後、エコロジー、気候の変動、再生可能なエネルギー、原子力エネルギー、自然界の中の放射能ということ、それに非常に重要なトピックであります安全性ということ、そして原子力エネルギーの将来ということについてお話ししたいと思います。

それから、原子力を支持する環境主義者協会、EFNと呼んでおりますが、私自身が1996年に設立いたしました、現在のところ、世界中50カ国に約8,000人のメンバー、そして支持者を抱えております。このグループにつきましてもご紹介したいと思います。

幾つかの環境保護主義のグループ、例えばグリーンピースのようなところは、原子力エネルギーを使うということに反対しています。しかし、環境や科学的な観点から考えましても、原子力エネルギーを支持するべきであるという明確な理由があります。特に、環境ということを考えた時には、原子力エネルギーという選択肢が最善の解決策であるとさえ言えます。

しかし、もちろん私は、原子力を軍事目的で使うということに関しては、反対の意を唱える者であります。私はこれまでも、いわゆる環境保護主義の団体の人たちとさまざまな場面で対面したり、また実際に討論をしたりしてきましたが、彼らが原子力エネルギーに反対する理由というのは、まず、やはり、この地球という惑星を守りたいと真剣に思っている、それは事実です。しかし、彼らは原子力エネルギーが実際にどのように運用されているかということについては、いろいろ出ている数字に大変混乱をしているということが言えると思います。

例えば、いわゆる環境保護主義者と言っている人たちの中には、自然界の中に放射能というものが存在するということすら知らないという人もいますし、また、マイクロシーベルトとシーベルトの違いがわからないという人もいます。

このように、数字のバックグラウンドということがよくわからないのでありますと、マイクロシーベルトというレベルであっても、人が死んでしまうというように誤解をしてしまう可能性があります。

また、やはり数字に対する理解がきちんとできていないということになりますと、風車を建てれば、日本中をカバーする電力を作り出すことができるというような考えすら持ってしまう。その結果、真実ではないことに対して、妙に納得してしまっているという状況が生まれています。そこで、私たちにとって必要なことというのは、こういった環境保護主義者の人たちや一般大衆に対して、きちんとした教育をしていくということだと思います。まず、私のことを理解いただくために、私のバックグラウンドについて少しお話ししたいと思います。私の父親は石油採掘にかかわる地質学者でしたので、いつも自然に近くで育ちました。そして小さな頃から世界中のいろいろなところへ父親について回るということをしていましたので、地球に対して非常にグローバルな考えを持つようになったと思います。

その後、兵役についたり、また大学で勉強したりした後、私は自然に基づく健康や、環境保護といったことに携わろうと考えました。

そして、何か他人の役に立つことをやりたいと考えるようになり、サイエンティストという形で自分自身がいろいろ勉強したり、また、よりよい生活をするためにはどうすればいいかということ人を教えたりしてきました。世界中を旅行して、健康的な生活とはどういうものかということも人々に教えてまいりました。

また、私は自然の栄養についても研究してきましたが、特に、100%自然なチンパンジー型の食事というのが、免疫系に非常に良い作用を及ぼすということがわかってきています。いろいろな免疫疾患に対して非常に興味深い結果が出ています。

私は何年間も、ナチュラルなライフスタイルをする、生の食品を口にして、そして日中、短い昼寝をとることがいかに健康に良いかということを見ました。自然とか、それから環境といったものを尊重するためには、まず、自分自身の体を尊重しなければいけないと思います。

私の望みというのは、ぜひ人類を救いたいということと、それから環境を尊重したいということです。そこで、グローバルな観点から、エネルギーの状況というものを見直してみようという試みを始めました。これからそれについてお話をいたします。



これは、夜、宇宙から地球を見た写真で、NASAの映像を合成したイメージです。最も明るいうち、北米ですとか日本とかヨーロッパといった先進国が最もエネルギー消費量の高いところをあらわしています。

現在では、世界の人口の20%が世界のエネルギーの60%を消費していると言われていますが、この状況も変わっていきます。現在では、より貧しい国々、例えば中央アフリカとか、中米とか、中国といったところのエネルギー消費量が膨大に伸びてきています。

石油の埋蔵量のほとんどは、非常に小さなエリア（中東地域）に限られています。現在までのところ、ホルムズ海峡でテロは起こっていませんし、また、明白な破壊行為というものも経験しておりませんが、もし、このホルムズ海峡が封鎖されてしまうようなことになると、私たちの経済、文明にとって非常に大きな影響を及ぼすことになってしまいます。おそらくその影響というのは9.11（対米同時多発テロ）以上だと思います。

日本とかヨーロッパといったところは、この地域から産出される石油に非常に依存している地域であるということが言えます。

また1973年の第1次オイルショック、1980年の第2次オイルショック、現在では第3次オイルショックというのが2005年現在、起こっております。

しかし、この石油の問題というのは、石油価格の問題に限ったことではありません。今、私たちは、まさに石油生産のピークという時期に差ししかかろうとしているわけです。これから、いわゆる発展途上国と呼ばれるところで、特に石油の需要がどんどん上がってくるのに対して、石油の生産のほうは、ピークを過ぎるとますます減っていつてしまうわけです。

主なOPEC産油国の石油の枯渇率を見ますと、主な産油国、例えばインドネシアのようなところの枯渇率は75%ですし、カタールとかベネズエラといったところでも50%を超える枯渇率であり、全体的に平均しますと50%の枯渇率ということになります。

今、枯渇率が大体50%ということは、もう石油の生産のピークに近いところに差ししかかっているということが言えるわけで、今後、幾ら需要が伸びても、石油の生産量が伸びていくということはないわけです。つまり、これから近いうちに非常に重大な石油危機に直面するというのは明らかです。

このように、石油を利用して人類が活動を行った後は、CO₂という形で温室効果ガスとして大気中に排出しているわけです。この温室効果ガスというのは、人類がこれまで直面したことのない大きなチャレンジであると思います。私たちの惑星、地球が温暖化しているということです。

既に、20世紀に大気の大気温度は1度上昇したと言われてます。そして、21世紀になると、専門家の分析では、この温度上昇が3度ないしは6度、さらには10度の上昇ということを使う人もいます。3度といいますが、それほど温度の差としては大きくないように聞えるかもしれませんが、実際は、地球の氷河期と最も温度の高かった時期との差がそれぐらいなのです。

それでは、今すぐにこのCO₂の排出をストップしたと仮定しましょう。今すぐにストップしたとしても、もう既に私たちは大気中に大量のCO₂を排出してきてしまったわけですから、大気中のCO₂のレベルというのは、さらに数世紀上がり続けることになります。

多くの人は、このような時間のずれ、タイムラグがあるということに気づいていません。既に私たちの状況はまずいことになっているわけです。気候の時限爆弾にもう点火してしまったわけです。ですから、あまりにも手遅れになる前に、何らかの手を打たなければいけない。すぐに何らかのアクションをとらなければいけないわけです。

環境主義者の中には、風力やソーラーエネルギーを使ったらいいと言う人もいますが、分散的なアプリケーションを考えるという点ではいいと思いますが、東京や大阪のような先進国の大都市で利用するのは無理だと思います。

私もエンバイロメンタリスト、環境主義者として、こういったさまざまなエネルギーの開発ということはもちろん推進されるべきだと思いますが、これでは十分ではないということです。何かもっと大きなエネルギー源というものが必要だというのは明らかです。

原子炉というのは非常にコンパクトで、小さな面積のところにつくることができます。もちろん、ウランというのは再生可能ではありませんが、まだまだ、かなり長い期間にわたって供給可能な資源です。化石燃料と比べますと、ウランの生み出すエネルギーというのは100万倍に相当します。つまり、ウラン1グラムで、石油1トン分のエネルギーを生むことができるわけです。ですから、ウランの鉱山がほんの幾つか地球上にあるというだけで、何十万という油井に取ってかわるだけのエネルギーを生むことができるわけです。

また、放射性廃棄物ということに関しても、非常に問題のないものであるといえます。また、CO₂の排出量ということから考えても、原子力エネルギーを使うことにより、これまでのエネルギーに比べて何百万分の1といったレベルの排出量に抑えることができます。

この放射性廃棄物については、フランス全体で、1人の人間が放出する高レベルのガラス固化された放射性廃棄物の量と

いうのは、ゴルフボールぐらいの大きさでしかありません。このように、放射性廃棄物というのは非常にボリュームが小さいということから、とても簡単に閉じ込めることができますし、また再処理をして、安全に埋蔵することができます。そして、その上に、ほんの数メートルの土をかぶせるだけで、ガンマ線を完全にシャットアウトすることができますし、また、薄い紙1枚だけでアルファ線をシャットアウトすることもできます。

つまり、本当に少し気をつけさえすれば、こういった放射性廃棄物からの保護ということについては問題ないわけです。

実際、この放射性廃棄物に関する、エコロジストが言っている恐怖というのは、あまりにも強調され過ぎていると思います。取り扱いさえ適切にすれば、放射性廃棄物というのは全く危険ではありません。放射性の廃棄物に関しては、テクニカルな問題というのは、現在、もう無いと言えます。既に解決方法があるということで、再処理をして、ガラス固化して、そして、選ばれた場所に安全に埋蔵すればいいわけです。ですから、放射性廃棄物に関する問題というのは、むしろ一般大衆の理解とか、それから社会的な受容の問題であるということが言えるでしょう。

それでは、これからヨーロッパのエネルギー事情について少しお話をしたいと思います。

まず、フランスでは、現在58基の原子炉が稼働しておりまして、58基すべて、うまく稼働されております。そして、フランスの電力の80%を賄っています。そして、フランスでは15%が水力発電ということですので、フランスで生産されているエネルギー、そのキロワットというのは95%、非常にクリーンであるということが言えます。つまり、CO₂を全く排出しないということです。

ドイツにおいては、18基の原子炉が稼働しており、30%の電力を供給しています。緑の党がドイツの政権をとっていた時に、この原子力の段階的な廃止ということを決定しまして、またそれと同時に、多額の投資をして、何千という大きな風車の建設を決めました。

また、ドイツでは、つい最近（2005年9月）に総選挙が行われ、これまで反原子力の立場であった与党が、原子力発電の必要性を主張している党との連立政権になったことから、今後ドイツでの原子力エネルギーに関して、政策変更が行われる可能性が生じています。

しかし、実際のところ、20年間に及ぶ原子力発電の段階的な廃止が現実のものになるとは考えにくく、これまでのところ、停止されたのは1基だけでした。また、それまでの間に、何回か総選挙が行われるということになりますので、私としては、この状況というのは良いほうに変わっていくのではないかと考えており、この段階的な廃止が実施されない可能性が高いと思われます。

また、フランスとドイツの国民1人当たりのCO₂の排出量というのを比べてみると大変興味深いのですけれども、ドイツはたくさん風車を建てたにもかかわらず、フランスの国民1人当たりよりも、CO₂の排出量は30%ないし40%上回っているという結果になっています。

ベルギーでは7基のPWR型の原子炉が稼働しており、約半分の電力を賄っています。やはり、ベルギーにおいても、原子力の段階的な廃止ということが数年前に決定されました。当時、いわゆる緑の党が政権をとっていたわけです。しかし、現在では緑の党が政権を去っており、原子力の段階的な廃止という決定は先延ばしにされるか、もしくは、廃止そのものが見直しされる可能性もあります。

イギリスには23基の原子炉があり、およそ電力の4分の1を賄っています。そしてイギリスは、何らかの決定を迫られる状況にあります。つまり最も古い黒鉛型の原子炉が、いずれは停止しなければならない状況であり、また同時に、北海の油田、ガス田の生産量も下がっていくからです。

トニー・ブレア首相は、2004年までは、2050年を目指してゼロカーボンのエネルギーを達成すると、そして、原子力エネルギーというのは選択肢の中に入れていないことを言っておりました。しかし、2004年中に、私や私の友人のラブロック教授と一緒に、いろんなテレビ番組やラジオ番組、主にBBCの番組に出て、原子力に関する真実というのを語ったわけです。今の状態では、そんなユートピアは長続きしない、もっと現実を見ないといけないということを、おそらく30回か40回ぐらいはテレビやラジオで言ってきたと思います。

そうしますと、政治家の言うことも変わってまいりました。つまり、6、7カ月前ぐらいから、やはり2050年にゼロカーボンのエネルギーを達成するという目標は変わらないけれども、原子力エネルギーというのを選択肢から除外することについては、再考したほうがいいのかという言い方に変わってきました。さらに、その後、数回BBCに呼ばれて、テレビで話をしたのですが、やはり政治家の話の内容も少しずつ変わってきました。原子力エネルギーを排除するというよりも、原子力エネルギーを選択肢の中に入れるべきだというトーンに変わってきました。このように、政治家の考えというのは、一般大衆がどのように考えているか、どのような信念を持っているかということ、特にテレビなどで知ったことに大きな影響を受けるということが言えるでしょう。

スウェーデンでは10基の原子炉がありまして、約半分の電力を賄っています。やはり、水力発電というのもスウェーデンでは重要になってきておりますが、近隣の諸国からの輸入に頼らざるを得ないという状況が生じてきています。原子力の段階的な廃止ということを経験した1981年に国民投票によって決定してから、2基の原子炉をストップしてしまったからなのです。この原子炉から電力がつかれないということになりますと、やはり石炭火力とか、それから近隣諸国からの輸入電力というものに頼らざるを得なくなってしまいました。これはスウェーデンにとってもよくありませんし、環境にとっても、もちろん、非常によくないことです。クリーンで安全な原子力エネルギーのかわりに石炭火力に頼るというのは、100年ほど時代を逆行したということに相違ありません。

フィンランドの状況ですが、4基の原子炉が約3分の1の電力を賄っております。フィンランドは、最近、フランスのEPR型の原子炉の購入を決定しました。これは京都議定書を遵守するという目的でのことなのですが、2009年か2010年ごろに運転開始されることになると思います。

この京都議定書を遵守するために、ヨーロッパで決断された方法の1つは、石炭を使っていた火力を天然ガスのプラントに転換するというものでした。しかし、そのような転換を行っても、グローバルな排出量としては数%しか削減することができませんし、また、一時的な削減ということになります。

ヨーロッパの政治家は京都後ということで、2020年までにCO₂の排出量を50%削減するという約束をしています。これは非常に崇高な目標であると思いますが、しかし、実現するのは非常に困難であると思います。僅か5%削減するということでは、え実現が非常に難しいという現状の中で、この50%、2020年というのは、あまりにも崇高な目標だと思います。

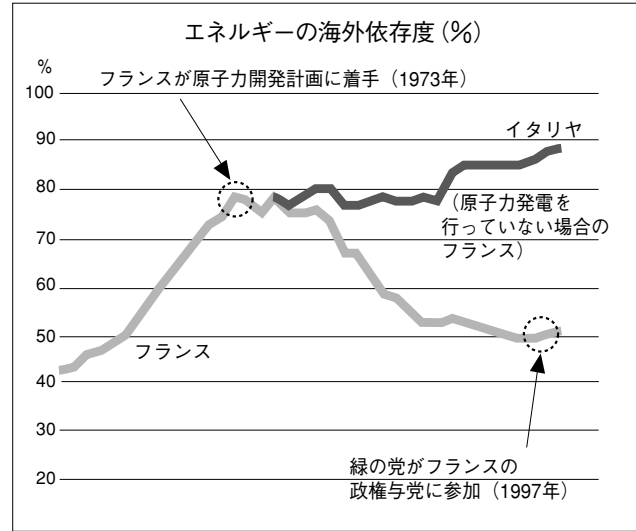
いずれにしても、ポスト京都ということを考えた時に、私たちは、原子力、そして清潔で汚染を生じさせないエネルギーの開発を考えなくてはなりません。原子力エネルギーというのは非常にクリーンなエネルギーでありますし、また、そのことにはきちんとクレジットも与えられています。原子力というものを排除しようという試みの中からは、完全にCO₂排出量を削減するという目標の解決策というのは生まれてこないと思います。

ヨーロッパ全体のおさらいをしてみますと、フランスの立場というのはヨーロッパの他の国とは少し異なっています。おそらくこの原子力エネルギーというものを重視しているフランスだけが、京都議定書の基準を達成することができ、そのほかの国は非常に難しいであろうということが言えると思います。

また、ラ・ハーグの再処理工場付近での白血病の問題というのもマスコミによく取り上げられています。実際のところは、1968年から1986年の間に発症した白血病の増加数というのは2症例だけだったのですが、この2症例の増加というのも、統計的には決して有意な増加ではないわけです。またこの統計データが1996年までの期間でアップデートされると、全く白血病の発症の増加はなかったという結果になっています。

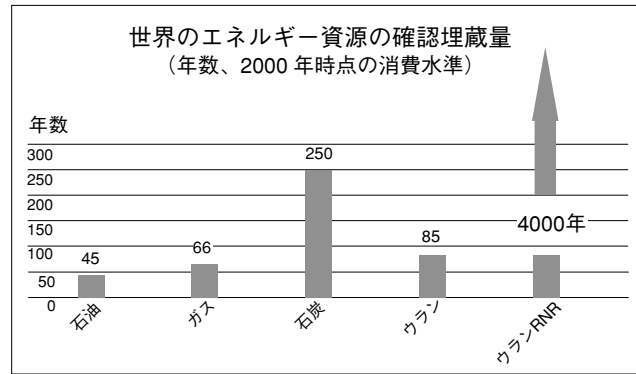
最終的には、グッドニュースということで、このラ・ハーグの再処理工場の周りに居住し、仕事をするということには全く問題がないとわかりました。これは六ヶ所村についても同じことが言えると思いますし、また周辺海域からとれた魚を食べても、全く問題がないことが言えると思います。

次のグラフは、フランスとイタリアの輸入化石燃料の依存度を示していますが、1973年の最初の石油危機までは両国とも同じ道をたどっていました。中東からの輸入の石油に依存していたわけですが、1973年にイタリアとフランスが全く異なった決断をしてから、このグラフの推移が両国の間で全く変わってきました。イタリアは原子炉の建設を全く行わず、一方フランスは原子炉という選択をしたわけです。



現在イタリアでは、国民1人あたりの環境汚染はフランスの水準を上回っており、またイタリアの電力料金というのはフランスの2倍となっています。そして、また、イタリアはフランスから電力を輸入しています。ですから、イタリア経済に投入される追加負担は、年間約200億ユーロとなっております。

しかし、1997年いわゆる緑の党がフランス政権与党に参画すると、そのときにEPRの建設を遅らせるという決定をしてしまったのです。それから少し化石燃料への依存度が再び上昇し始めました。



これは、世界のエネルギー資源の埋蔵量を示しています。石油とガスを利用できるのは、今後数十年に限られています。しかし、注意しなければならないのは、あくまでも今日の消費速度で、ということです。生産のピークがすでに過ぎている国も多数存在するわけです。問題はこれからさらに消費ペースが早くなる可能性があるということです。例えば、石油の45年というのも、22年ぐらいに短縮されるであろうと考えられます。

石油に比べると、石炭は埋蔵量が豊富にあります。しかしこれは最も汚染を引き起こす物質であります。ウランを見てみると、既存の原子炉で使用された場合を考えると、85年分の埋蔵量があります。しかし、ウラン鉱山については、最近新たに発見された鉱山も出てきております。例えば、つい最近、カザフスタンに新しいウラン鉱山が見つかりましたので、さらにこの数字が伸びる可能性があります。新しい発見が増えていけ

ば、これはさらに伸びていく可能性があるわけです。

しかし、再処理ということを考えて、また、高速増殖炉を利用するということを考えますと、このウランの埋蔵量というのはさらに50倍伸ばすことができると思います。ですから、約4,000年までこのウランの埋蔵量というのは伸ばすことができると思います。

また、トリウムというのも注目すべき資源でありまして、ウランに比べて、約3倍ないしは4倍近くの量が存在しております。もちろん、ウラン資源も、無限のものではありませんが、今わかっているウランの資源ということを考えただけでも、私たちの子供たちのひ孫の世代までは十分にもつだけの埋蔵量があるということです。ですから、今、気候の変動等、いろいろな危機が起こっておりますが、それに対処するために、次のエネルギー源というのを考慮するための時間は十分にあるということになります。

このように、原子力エネルギーというのは非常に強力なものであると同時に、やはり、そこにはリスクもあるわけで、このリスクに対しても適切に対処することが重要です。

どんなエネルギーもリスクがないということはありません。非常に残念ではありますが、このことは理解する必要があります。ダムだって決壊するわけです。

1979年に起こったスリーマイル島の事故というのは、みんなの記憶の中にあると思いますが、その同じ年にインドで大きなダムの決壊があったということを記憶している人はほとんどいないと思います。全く同じ1979年に、インドのモルビーダムが決壊して、3万人の方が亡くなりました。私は非常に奇妙だと思うのですが、実際、スリーマイルの事故ではどなたも亡くなっていないのです。どなたも負傷もされていないのです。しかし、みんなの記憶の中に残っている。このモルビーダムの決壊では、3万人の方が亡くなっているのに、だれも覚えていないわけです。

2004年7月にベルギーで起こったガス爆発事故で、22名の方がお亡くなりになりました。同じ年の夏に、美浜の3号機で水蒸気の爆発事故があり、残念ながら5名の方がお亡くなりになりました。もちろん、お亡くなりになった方々は非常に悲しいことですが、絶対にこのような事故が二度と起こってはいけなくて、すけれども、圧力のかかった水蒸気というのは非常に危険なもので、これは石炭火力であっても、ガス火力であっても、どこでも起こり得ることなのです。

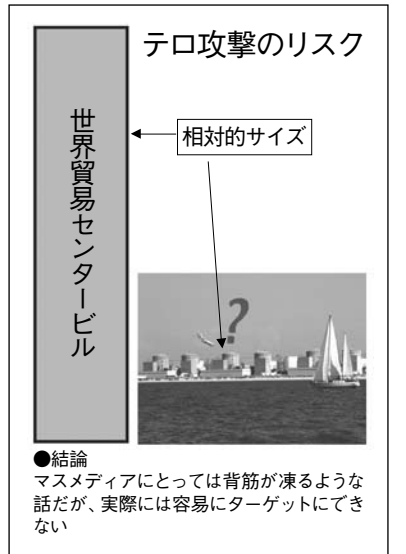
チェルノブイリの事故、これはこれまでに起こった中でもやはり最悪の事故であったと思います。このチェルノブイリの原子炉の設計そのものがまず不安定でした。きちんとした閉じ込めが全く行われていなかった、格納がなされていなかったという状況でした。この日、チェルノブイリで行われた実験というのは非常に危険であるということがわかっていたので、オペレーターは、その危険な実験を行うために、セキュリティシステムを外してしまっていました。つまり、どういう状況だったかといいますと、ブレーキがついていない非常に古い車を、ひどく酔っ払ったドライバーが、200キロというスピードで、狭い山道を運転していたと

いう状況と同じなのですね。

次に、テロ攻撃の可能性ということについてお話をしたいと思います。実際に、この原子炉の建屋というのは、その周りにたくさん2次棟があり、多くの建物で囲まれています。その真ん中に原子炉があります。この原子炉の建物というのは、小型の飛行機の墜落事故であれば、耐えられるように設計されています。

また、その格納容器の建屋というのも、1メートルの厚さの鉄筋コンクリートでできており、また大体丸い形に設計されていますので、仮に何かがぶつかってきたとしても、その丸い表面からはね返されるという可能性が大きいわけです。また、何か機械的な振動が与えられますと、耐震性のための保護機能が働きますので、原子炉は自動的に停止するように設計されています。

この写真を見ていただければ、ニューヨークのワールドトレードセンターと、それから原子炉の建物の大きさがどれくらい違うかということがおわかりいただけると思います。実際に表面に出ている面積でいいますと、ワールドトレードセンターの100分の1ぐらいしかない、非常に小さいわけです。実際、ニューヨークの事故では、このワールドトレードセンターの横のところに



に飛行機が突っ込んだわけですが、非常に腕のいいパイロットであっても、原子炉をねらってそこを攻撃するというのは非常に難しいと思います。

仮に、うまく格納容器にダメージを与えることができたとしても、その格納容器の上部だけだと思います。実際には、原子炉というのは、この容器の下の方に置かれているわけです。しかし最悪のケースが起こって、放射能が大気中に放出されてしまったとしても、既に、解毒剤としてのヨウ素剤を周辺住民に配っておりますから、それで対処することができます。

いずれにしても、犠牲者の数というのは、例えば大阪とか東京といったワールドトレードセンターのようなビルがあるような都市で、こういったテロの攻撃があった場合の犠牲者の数と比べると、はるかに少ないと言えます。つまり、マスコミにとっては、これはパーフェクトなシナリオなのです。しかし、決して、この原子炉というのは簡単な標的ではないということです。

さまざまな原子炉の開発も行われています。現在では主に水冷却の原子炉ですが、さまざまな改良型の原子炉、特に日本ではABWRの開発、生産が行われています。また、さらに新

しい高温炉というのが考えられておりまして、これは特に発展途上国で非常に有望な原子炉になってくると思います。途上国だけでなく、日本でも水素の製造の目的で、この高温炉というのは非常に有望だと思います。特に日本はこのHTTRという高温炉を大洗で開発しておりまして、これは新しい世代の高温炉として世界のリーダーとなり得る非常に有望な物であると思います。

また、さらに、第4世代の原子炉というのが建設されており、例えば「もんじゅ」のような高速増殖炉がその世代に当たります。これは、同じ量のウラン資源を使い、50倍から100倍高いエネルギーを生み出すことのできる原子炉であることから、非常に有望な新しい技術であり、持続可能なエネルギーの供給にとってなくてはならないステップであると思います。

フランスにも同じようなタイプのスーパーフェニックスという、1,200メガワットの原子炉があります。しかし、このスーパーフェニックスというのは、1997年にいわゆる緑の党が政権についたときに閉鎖されてしまいました。

実際、このスーパーフェニックスというのは非常にうまく稼働しておりまして、閉鎖される前の1996年に、フルパワーでの稼働というのを達成していました。安全当局のほうからも、全く問題がないというお墨つきをもらっており、環境、安全、技術、すべての観点から大丈夫だと実証されていた原子炉で、純粋に政治的な理由で閉鎖されました。ですから、フランスとしましては、「もんじゅ」の運転の再開、そして、その後の継続的な成功を本当に期待して見守っています。

それでは、私の作りました原子力を支持する環境主義者協会、EFNをご紹介したいと思います。EFNは急速に増大したグループでして、現在、世界中50カ国に8,000人のメンバーが活動しています。私たちの目的というのは、反原子力を唱える人たちの議論にどのような弱点があるか、ということをきちんとアピールしていくことです。確かに、グリーンの人たち、環境保護主義者の人たちの主張というのは、ある側面では正しいわけです。私たちは、現在、環境を破壊していると、これは真実です。そして、そういうことを言われますと、一般大衆というのは非常に心の奥底で深く受け止めるわけですね、私たちは破壊しているのだと。しかし、こういう環境保護主義者の人たちが一般大衆に与える恐怖によって、原子力エネルギーに対する考え方を間違った方向に導いてしまう可能性が大きいわけです。化石燃料について、原子力エネルギーに対して持っているイメージで、間違った方向に引っ張っていく可能性があります。ですから、私たちとしては、できるだけ率直に正しい事実を一般大衆に伝えていこうという目的で活動しています。

イギリスで友人のラブロック教授は、1960年代から非常に有名な環境主義的な考え方の父として、世界中で活動をしてこ

られた方です。私どもEFNの活動を完全にサポートしてくださっています。

私たちが化石燃料を燃やし続けるということは、決して道理にはなっているものではないということで、私たちに二重の危機をもたらしています。石油の危機と、それから環境の危機です。これから数十年の間に石油が枯渇してしまう状況の中で、私たちは、今後、非常に厳しい年月を過ごしていかなければいけません。例えば、フランスの原子力のプログラムのような、全く新しいエネルギーのインフラを構築するのには25年かかります。ですから、私たちはできるだけ早くアクションを起こさねばなりません。そうでなければ、私達の文明を継続させていくことはできません。ラッキーなことに、私たちは解決方法を持っているのです。ですから、あまりにも時期が遅くなり過ぎる前に、何らかのアクションをとらなければいけません。

最近、世界でも非常に有名な環境主義者が、原子力に賛成であるということを表明してくださっています。そのうちの1人がパトリック・ムーア博士で、この人は1960年代にグリーンピースの創設にかかわった人です。現在では、ムーア博士はもうグリーンピースには所属していません。現在はEFNの考えに非常に共鳴していただいており、EFNのカナダ支部の設立に貢献していただいています。

もう1人は、イングランドのモンテフィオリ司教、英国教会の司教でいらっしゃいますが、この方も「地球の友」という環境団体の理事を長年務めてこられた方でして、1年前にラブロック教授と私と一堂に会しまして、明白に原子力エネルギーを支持するということを表明してくださいました。

このように、世界中で、非常に著名な方々が原子力エネルギーに対する考え方というのを最近変えておられます。

結論として、以下の3つの点を挙げたいと思います。

まず第1点、持続可能な将来のために、クリーンで安全なエネルギーの供給を地球上のすべての生物に対して提供していかなければいけないということ。第2点、きちんと設計され、きちんと建設され、そして、きちんと運用されている原子力エネルギーというものは安全であり、クリーンであり、私達の文明の将来における継続のために不可欠なものであるということ。第3点、原子力反対の意見を表明している環境保護主義のグループ、グリーンピースのようなところの考え方というのは大きな誤りであるということ。そしていずれは、誤りであると受け止められるようになると思われます。

皆様、どうも長い間、ご清聴ありがとうございました。